

# 「現代徒然草」を書く —活動的な学習は、深まるのか?—

金子 直樹

「アクティブ・ラーニング」が、うるさい。国語は、中教審まとめて「…教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある」などと叱られたためか、指導要領の改訂を迎え取ろうする「改善」の動きもあるらしい。困ったものである。私たちが「軽視」してきた「主体的な言語活動」とは、どのようなものをいうのであろうか。また、「主体的な言語活動」によって、どのような成果が得られるのであろうか。

## 1. 授業の概要

本稿は、2015年度4年生(高校1年生)を対象にしておこなった授業の記録である。2学期後半11月中旬から学年末まで約20時間かけて『徒然草』を読み、学習のまとめとしてレポート「現代徒然草を書く」を課した。

### (1) 『徒然草』を読解する

教材構成は以下の通り。1講を導入に4講までの構成として、各講では①②…のまとまり毎にプリントを作成し、各章段を関連づけながら読んでいった。授業で多くの章段を扱うのは、生徒の『徒然草』理解をより具体的に、幅を持たせるためである。全てを読解形式で扱ったわけではなく、他の章段との関連を意識しながら音読(斉読)に止めたものも多い。(「・」印は、問題演習形式で与えたもの。)学習の便宜のために、口語訳は全て与えている。

各段冒頭文言後の(数字)は、レポート「現代徒然草を書く」において生徒が言及し取りあげた回数である。

#### 1 講、中学校の復習から

- 52 段：仁和寺にある法師(2)
- 53 段：これも仁和寺の法師
- 54 段：御室にいみじき児のありけるを(1)
- 236 段：丹波に出雲といふ所あり(1)
- 92 段：ある人弓射ることを習ふに(18)
- 109 段：高名の木登りといひし男(11)

#### 2 講、達人・専門家について

- ① 51 段：亀山殿の御池に大井川の水を(10)
- 114 段：今出川大臣殿嗟峨へ(1)
- ② 110 段：双六の上手と言ひし人に(7)
- 111 段：囲碁双六好みて明かし暮らす人
- 150 段：能をつかむとする人(18)
- 151 段：ある人言はく年五十になるまで(5)
- 167 段：一道に携はる人(5)
- 168 段：年老いたる人も(4)
- 193 段：くらき人の人をはかりて(3)

・ 80 段：人ごとに我が身に疎きことを

- ③ 145 段：御隨身秦重躬(3)
- 146 段：明雲座主相者に会ひ給ひて(2)
- 185 段：城陸奥守泰盛はさうなき馬乗り(2)
- 186 段：吉田と申す馬乗りの(1)
- 187 段：よろづの道の人たとひ不堪なりと(5)
- ④ 177 段：鎌倉中書王にて御鞠ありけるに(4)
- 231 段：園の別当入道はさうなき包丁者(2)

#### 3 講、兼好の思想

- ① 59 段：大事を思ひ立たむ人(18)
- 155 段：世に従はむ人は(12)
- ② 137 段：花は盛りに月は隈無きをのみ(21)
- ③ 188 段：ある者子を法師になして(3)
- ④ 217 段：ある大福長者の言はく
- ⑤ 82 段：薄物の表紙はとく損ずるが(4)
- 83 段：竹林院の入道左大臣殿(3)
- 6 段：我が身のやむごとなからむにも
- ・ 142 段：心なしと見ゆる者も
- ⑥ 39 段：ある人法然上人に(5)
- 58 段：道心あらば住む所にしもよらじ
- 157 段：筆を取れば物書かれ楽器を取れば(3)
- ⑦ 10 段：家居のつきづきしくあらまほしき(2)
- 11 段：神無月のころ栗栖野といふ所を(2)
- 41 段：五月五日賀茂の競馬見侍りしに(2)
- ⑧ 91 段：赤舌日といふこと陰陽道には(7)
- 206 段：徳大寺の故大臣殿(2)
- 207 段：亀山殿建てられむとて(1)
- 50 段：応長の頃伊勢国より(1)
- 68 段：筑紫に某の押領使など(2)
- ・ 73 段：世に語り伝ふること(2)

#### 4 講、世俗への興味

- ① 88 段：ある者道風が書ける
- 89 段：奥山に猫またといふものありて(8)
- 125 段：人に後れて四十九日の仏事に(1)

209 段：人の田を論ずる者(1)

- ・141 段：悲田院の堯蓮上人は
- ・184 段：相模守時頼の母は
- ・215 段：平宣時朝臣老いの後

## (2)「現代徒然草」を書く

この授業では、学習のまとめとして「現代徒然草を書く」ことを当初から生徒に明示して、読解の過程でも、生徒たちの日々の学校生活や社会の時事問題などに例を取って説明し、また例を挙げて説明させるなどの活動を意識的に取り入れた。

年度末に、以下の注意事項を附して、「現代徒然草」を B5 版用紙 1 枚にまとめて書くことを課した。なお、時間の都合で、提出期限は新年度 5 年生の 5 月とした。

### ①内容

- ・『徒然草』から読み取った兼好の思想や主張、人間への観察や興味を、現代社会に引き写して、具体的な出来事として表現する。
- ・私たちが生きる現代社会の、「ああ、ここに『徒然草』がある」という瞬間・場面を、切り取り、写し出す。

### ②評価の観点

- ・理解：『徒然草』に表された筆者兼好の思想や主張、人間への観察や興味を、正しく理解しているか。
- ・発想：1 での理解を的確に表現する具体的な出来事を選択しているか。
- ・表現：出来事を、分かりやすく魅力的に表現しているか。

### ③発表・評価の方法

- ・相互評価によるコンテスト形式で行う。  
クラス全員分の作品を無記名でプリントにしたものを読み、その中から優秀作を選出し、コメントを加える。
- ・投票・得票結果は公開し、上位入選作に寄せられたコメントも紹介する。

### ④注意

- ・『徒然草』は、授業で扱った章段以外に因っても可。
- ・作品紹介は『徒然草』章段数の順に行うので、『徒然草』第何段から発想したものであるのかを明記すること。複数章段可。
- ・作品に記述するの出来事は、現実の事象でも架空のものでも可。現実の事象を扱う場合には、適切な配慮をすること。
- ・作品の出来事を記述する文体は、物語風でも説明調でも可。ポイントは、人の動きや状況という具体が明確であること。
- ・作品の出来事の、『徒然草』との関連や発想の根拠について、解説・自讃を必ず添えること。

- ・印刷の都合や読者の便宜を考慮して、枠外はみ出し厳禁。文字や句読点は濃くはっきりと記すこと。

クラスに読んで評価してもらうことが前提であるので、見やすい仕上がりを心がけること。そのためにも、必ず下書きをすること。

## (3)「現代徒然草」を読み合い、評価する

生徒が提出したレポートをクラス全員分印刷した。このような形態の授業では、指導者は活動＝書き物の処理作業に多大な時間と労力を費やす覚悟が必要になる。

・「名前」ではなく作品の出来で選ぶために、書き手の名前は省き言及した章段順にエントリーナンバーをつけて並べ替えた。

・生徒一人が B5 版 1 枚を提出しているの、クラス 40 人分は B4 版両面で 10 枚になる。それを人数分 40 部印刷することを、5 クラス分繰り返し行った。

手間はかかるものの、このような「生徒の書いたものを互いに読み合う」授業を行う度に実感するのは、生徒たちが実に真剣に友だちの作品を読むということである。今回はコンテスト形式で点数評価をするという活動を加えたため、いっそう集中度が増していた。

生徒の評価(採点)は、前述「評価の観点」を確認した上で、下読みから本選へ上がってゆく文学賞形式で行った。まず全体を一通り読んで、水準以上のもの約半数(20 以内)に 1 ポイントを与える。次に 1 ポイントのものを再読して約半数(10 以内)を 2 ポイントにする。最後に、2 ポイントのものからベスト 3 を選び 3 ポイントにするという三段階のふるいにかける、ベスト 3 には評価すべき点を選評として書かせた。

採点の実際は、エントリーナンバーと採点枠、ベスト 3 への選評記入欄のある採点シートによって行った。結果を全て公表することも事前に確認した。採点結果をエクセル表形式(横にエントリーナンバー順に執筆者一覧、縦に出席番号順に採点者一覧)として、どの作品が誰から評価されたかが分かるようにしたものを配布することとした。

評価の結果を生そのまま出すのは、誰からも評価されない 0 点の者への処遇が心配になるところではあるが、試験のように正否を問うのではなく、発想や例示を問う活動では、クラス 40 人もいれば多様な基準での評価がなされる。生徒集団の質にもよるが、この学年では 1 学期に『伊勢物語』の学習において、「和歌アプリを使って和歌を作る」コンテストや、伊勢物語に描かれた世界を「現代の私たちがどう読み取るのか」という感想文コンテストを実施した結果、「票が割れる」という実感を得ていた。今回の「現代徒然草を書く」コンテストでも、5 クラスとも評価 0 点はいなかった。

## 2. 「現代徒然草を書く」作品から

以下に、生徒作品からいくつかを紹介する。

( )内は、生徒が参照・言及した『徒然草』章段、

\*コメント以下は、生徒自身が附した「自讃」である。

○作品1 (92 段：ある人弓射ることを習ふに、, 155 段：世に従はむ人は)

ある提出物の期限が一ヶ月後と言われたとする。ある者は、一ヶ月もあるからとってその日は予定(提出物の)だけを立てて寝てしまう。その次の日もまだ30日もあるからと手を付けない。結局それを繰り返して、予定通りに終わらず、一日前にあわてて答を写したりしてしまう。「明日から」というやつは絶対にまた「あさってから」といって終わらない。出されたその日にすぐにやり始めなければならない。

またそういうやつにはテスト期間を設けてはいけない。テスト期間があるから、その時にすればいいと思って、普段全く勉強しようとしないのである。またそういうやつは結局テスト期間中も勉強しない。

\*コメント：今回私は、勉強のことについて二段に分けて書いた。前半は、155 段からとったもので、やらなければならないことはすぐにやれということを書いた。史記レポートを提出日に例えた。後半は、92 段の弓の話からとった。「そういうやつ」を「弓の初心者」に、「テスト期間」を「二本目の矢」に例えて書いた。書いてみると、なんだか自分を写しているように見えてきた。

○作品2 (92 段：ある人弓射ることを習ふに、109 段：高名の本登りといひし男)

劇団員の男は二十年以上演劇一筋なのに、なかなか大きな役がもらえない。男の弟も同じ劇団にいたが、男より実力がある。

ある日、劇団は大事な公演を終え、みんなで打ち上げに行くことにした。男は弟を誘ったが、弟は断った。「たくさん練習をして公演は無事終わったのに、どうしてみんなと祝おうとしないのか。」と聞くと、「公演のあと、お互いにほめ合って演技論を語り合っていたらどんな力がつくのか。本番が無事終わったからといって安心して自分のミスを見落として、上手になるチャンスを逃してしまう。」と、一人残って練習した。

次の公演。弟は主役の座を射止めた。

\*コメント：109 段では、簡単な場面で油断すると失敗すると言っている。大きなイベントや、ステージの後の打ち上げは、この油断と同じだと思う。練習や反省は本番の直後にしなくては意味が無いのに、そのことを忘れてご飯を食べに行ってしまう。また、打ち上げは楽しくて好きだが、そこでは○○論みたいなのを語り合い賛

成し合い、自分ができる人のような気持ちを味わえるけど、実際には何も進んでいない。92 段の一瞬の懈怠の心にもつながると思う。名人や達人と呼ばれる人たちは、大事な本番のあとだからこそ油断せずに反省し、練習をすぐに再開するのだらうと思う。

○作品3 (150 段：能をつかむとする人)

高校に入ったばかりのA子とB子は、二人で剣道部に入部した。他の剣道部員(一年生)は皆、中学校でも剣道をしてきたため、初心者はA子とB子だけだった。二人は初心者ながらも他の部員に少しでも近づくため、練習に一生懸命取り組んでいた。

試合が近づいてきたある日、部会でエントリーについての説明を受けた。A子は下手ながらも実力を知りたいと思い、エントリーをすることにした。B子はもう少し上手くなってから試合に出たいと思い、エントリーしなかった。試合後、A子は自分の力不足を思い知り、一層練習に取り組むようになった。一方、B子は今までと変わらず練習していた。

そのうち、A子とB子の練習態度に差が出てきた。A子はどんな練習にも積極的に取り組み、試合も毎回参加した。B子は練習には参加するが、だんだんそれが作業化していった。しかも試合には「まだ下手だから…」と相変わらず受身で参加しなかった。

一年後、練習を「一生懸命」頑張ったA子と、「普通に」やっていたB子には大きな差がついていた。

\*コメント：150 段では芸能を身につけようとする人が、練習を積んでから人前に出た方が良くと考えていて、兼好法師はそれに反対し、実力が無いうちから人前に出た方が良く書かれていた。私は前者をB子、後者をA子、舞台を剣道部にして描いた。

○作品4 (89 段：奥山に猫またといふものありて)

午後8時、真っ暗の夜道をA君は一人で歩いていた。さっき友人の家で見た「本当にあった怖い話」のせいか、歩き慣れているはずの家までの道がやけに不気味に感じる。ふと、誰かがすぐ後ろを歩いているような錯覚に陥る。気のせいだと思っても、つい何度も振り返ってしまう。すれ違う車の運転手の首があることを確認し、家のドアを開ける。

家の中でもなにか落ち着かない。洗面所の鏡を見られない。カーテンの隙間がいやに目につく。前にどこかで聞いた、「幽霊は後ろにいますと思ったら、上にいるものなのだ」という話を思い出した。A君は「幽霊なんか、いるわけがない」と笑い、横向きで寝た。

\*コメント：A君はとて怖がりだ。普通の人より少し重症だと思う。A君も分かっているのである。「本当

にあった怖い話」など本当にあったわけがないことも知っている。しかし怖いものは怖い。そして思い込んでしまう。もしかしたら本当にあるのかもしれないと、一度気になりだすともう離れない。普通なら気にとめないことに敏感に反応してしまう。そのようなことは、昔も今も変わらないものなのだ。こんな怖がりなA君、端から見れば情けないが、こういう人間はいつの時代でもいるのだ。軽蔑しないでやってほしいものである。

#### ○作品 5 (89 段：奥山に猫またといふものありて)

今から何百年も前。世の中に「UFO」という言葉がなかった時代。人々は暗闇で光る物体を見て何と思ったのだろう。今、現代では「UFO」という言葉が広く使われるようになった。人々は暗闇で光る物体を見て「地球外生命体」だの「地球滅亡」だの必要以上に騒ぎだしている。しまいには「UFO 専門家」などという何の仕事をしているのかよく分からない人たちまで現れた。少し落ち着いて考えてみたら、「飛行機だ」とすぐにわかるものでも「UFO だ」といって騒ぎ出す。

私が最近見たテレビ番組で「UFO を追え」という内容のものがあった。三十分以上にわたり、「UFO の歴史」を解説した後、何とも怪しい「UFO 専門家」の人が三人出てきて、それらしき物が映っているビデオを判定した。その人たちは最後に「あ、これは、店のバルーンですね(笑)」と言ったので、私は何とも言えない気持ちになった。

\* コメント：89 段の猫またの話、人々が勝手に「猫また」という言葉を作り、必要以上に騒ぐので、法師が自分の飼犬を猫またと間違い、恐れる話である。これは現代の「UFO」に似ている。テレビ番組の話も、少し落ち着いてみれば「バルーン」だとわかるだろう。それを「UFO だ」だと決めつけてパニックになるから、冷静に見ることができなくなっているのだと思う。しかしここまで言っておいて、私も「UFO」を信じている。ここに猫またの話同様に、情報に流されやすい人間の本質が表れていると思う。

#### ○作品 6 (137 段：花は盛りに)

私たち田舎者がディズニーランドを訪れる時、綿密な計画を立てる。一つでも多くのアトラクションを楽しもうとマップを手に園内を走る。邪魔になることも忘れて、法外な値段のぬいぐるみを買う。この様子は東京の人からどう見えるだろう。多分私たちは片田舎の人である。

逆に、都会の人が田舎を訪れた時はどうだろうか。彼らは最近リニューアルされた江戸風の街並みを楽しんでいた。ゴミの一つもないピカピカの白壁をレトロだとな懐かしいなどと言う。私たちから見ると非常に滑稽だ。

田舎者を眺める都会人は、教養がある「よき人」である。しかし、田舎で観光地を巡る都会人は「よき人」であろうか。都会を巡る田舎者と同じ「片田舎の愚かなる人」だろう。

このことから、私が思うことは、教養があり情緒を知る人物でさえも、場合によっては愚かな人になるということだ。交通手段が発達した現代、「よき人」も簡単に移り変わる。

\* コメント：「祭」の片田舎なる人が、私と重なりました。しかし兼好の生きる時代と違って、祭や観光地に私たちは簡単に行けるようになりました。兼好の言う「よき人」「プロ」「無常を知る趣ある人」というのも、現代では変化していくものだと思います。

#### ○作品 7 (137 段：花は盛りに)

某テレビ局の某金曜ロードショーで、待ちに待った劇場版コナン第 19 作『業火の向日葵』が放送された。一年前に映画館で観て、ポルノグラフィティのラテン風で完璧な音楽と、映画の世界と現実とを結びつけるヒマワリ畑の空撮が組み合わせ合った、芸術的とも言えるエンディングで締めくくられた映画に鳥肌が立った。それなのに、だ。その番組はエンディングを丸ごとカットしてしまった。初めの緊張、終わった後の余韻を楽しみにしていたのに。かへすがへすも愚かなり。

\* コメント：「よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。」映画でもある。初めはどんなものかとわくわくし、終わってからは一人思い返してみるのがおもしろい、「をかしき」ことなのだ。それをないがしろにするのは、この段で言う「片田舎の人」同様、残念である。兼好法師も共感してくれるだろう。

#### ○作品 8 (151 段：ある人いはく、歳五十になるまで)

これは私の父の話である。今年の三月、ある会社で室長を務めていた父は部長に昇進することになった。とはいっても、周りの環境というものはそんなに変化せず、唯一変わったことと言えば、父が仕事の上司や部下から飲み会やゴルフに頻繁に誘われるようになったことだ。そういうわけで父は 50 歳を過ぎた年にもなっていきなりゴルフに熱中し始めたのだ。

最初のうちは家で練習する父のことを私は何も気にすることなく見ていた。父はとでも楽しそうに練習していたので、むしろ練習している父のことを少しではあるが応援さえしていた。

しかしその気持ちは月に一度ある会社のゴルフ大会の日を機に変わっていった。春休みに開催されたゴルフ大会で、あんなにも熱心に練習していたにもかかわらず、父は 75 人中 72 位という最悪な結果を残して帰ってき

た。上位は父よりもだいぶ若い部下たちでいっぱいだった。私はそれを聞いた時、一瞬かわいそうだと思ったが、冷静に考えてみると、もともと運動が苦手な父が、50歳を過ぎてゴルフに熱中しても、上手な若い部下たちに勝てるはずがないと思った。当然の結果だと思った。

しかし、父はまたゴルフの練習を始めるのだ。おそらく部下たちは自分たちより年上の上司のことを、表立って下手だと笑うことはできなかったのだ。心の中ではあざ笑っているというのに。だから父はなかなかやめようとはしない。私は、恥ずかしいしみともないからやめてくれと思うようになった。50を過ぎて下手なゴルフに熱中しすぎて、心の中で素人だとあざ笑われるよりも、ゴルフは息抜き程度で終わらせた方がよほど良いだろう、と思う。

**\*コメント：**151段では一般的に50過ぎの老人をアマチュアとして考えて話が書かれていたので、私は具体的にその一人である父について実際に感じている父のアマチュアぶりというものを、そっくりそのまま書き記していきました。「一般のアマ老人→父、芸→ゴルフ、世間→部下」というように、古文では抽象的である人物状況を、現代徒然草では具体的な人物状況設定に置き換えることで、より分かりやすく151段の内容を再現できたと思う。兼好が老人に対して、下手に芸をして見た目を悪くするのは愚かだという主張が、はっきりと表れた物語だと思う。

#### ○作品9(177段：鎌倉中書王にて御鞞ありけるに)

スーパーやコンビニに買い物にゆくと、お菓子やペットボトル飲料などにちょっとしたオマケがついているのをよく見かける。そのような商品の売り方は、煩わしく思える。商品を製造しているメーカーは日々商品をよくしようと研究しているだろうし、売れるという自信のある商品を販売しているはずだ。それなのに商品自体の良さを信じずに、オマケをつけてたくさん売ろうとしている。オマケというものは買う時にはよく見えても、いざ使うとなると実用的なものはほとんどなく使わないことも多い。商品の良さに自信があるのなら、商品を増量すればよいのではないか。増量するのができないのならオマケ分のコストを値段に還元して値下げすればよい。さらには、オマケを考える前に、商品自体をもっとよいものにするを考えるべきだ。

**\*コメント：**商品のオマケを177段の「鋸の屑」に例え、一時はよく見えても結局は「乾き砂子」つまり「値下げ・増量・品質 up」と比べれば下品で風変わりなものであるとした。生産者を「庭の儀を奉行する人」とすると、達人・専門家は常に根本的に専門としているものをよくするために、他の手段でそれをごまかすのではな

く、それと向き合ってゆくべきだという思想を反映した。

#### ○作品10(51段：亀山殿の御池に大井川の水を)

母が花粉症でアレルギー専門ではない医師のもとへ行き、薬を処方してもらった。しかしその薬を飲んでも花粉症が治まらない上に、動悸や喘息が悪化し、ついには薬が飲めなくなった。後日、アレルギー専門医を訪ねて診察してもらった。その専門医は全く違う薬を処方して言うことには「子供に出す分量の薬だと副作用が少ないので、花粉症には多様な薬を少しずつ出すのが効果的だ」ということだそう。その薬を飲むと症状はビタリと治まった。万にその道を知れる者はやむごとなきものなり。

**\*コメント：**非専門家と専門家との対比で専門家の凄さを強調する文章。構成も51段とほとんど同じになっている。

#### ○作品11(145段：御隨身秦重舁)

家の近所に、患者に薬を多く処方することで有名な病院があるのだが、ある日母が風邪を引いて、その病院で診てもらうことになった。案の定、様々な種類の薬を出された母は「これくらいの風邪ならこんなに薬を飲む必要はない」といって、この医者 of 指示に従わず、薬を処方通りに服用しなかった。すると風邪は一向に治らず、こじらせて病院通いが長引いてしまう結果になった。それ以来も度々この病院を利用するが、処方された通りに薬を飲むと病気は必ず良くなる。ただ単に薬を多く出しているのではないかと不満に感じていたのであるが、実は適切な処方なのであった。

**\*コメント：**医者 of 指示を信じずに薬を怠り病気が長引いたことと、145段において乗馬に優れた人物の指摘を人々が信じないうちに落馬がおこった話は類似している。どちらの話も、専門家の意見を尊重しなかったために残念な結果を招いてしまったことであるのと同時に、その道を熟知した専門家の偉大さがうかがえるエピソードであると思う。

### 3. 活動的な学習で得られるもの

#### (1) 深い学習と広い学習

筆者(金子)は2011年度4年生でも『徒然草』を扱った実践を行った。教材構成は今回とほぼ同様であるが、ゴリゴリの読解授業を通して、自身の読みの軸や傾向を意識させようとしたものである。そのまとめとして、

- ・自分が『徒然草』を読む際に、一番落ち着く読み方。
  - ・『徒然草』章段間の軸についての、自分なりの意見。
  - ・『徒然草』を読む中で気付いた、自分の読みの傾向。
- について記述をさせた。(当校「中等教育研究紀要第52

巻」所載「徒然草の授業―読みの軸を自ら設定し、批評的に読む―」)

授業の目的も方法も異なるので、当然ではあるが「まとめ」の生徒記述も全く異なったものになった。前回のまとめは、テキスト『徒然草』に表された思考を整理した生徒自身の思考の軌跡を表すという、いささか抽象的な難題でもあったため、飛び抜けて深い内容のものも多く見られたが、もちろん全員がそのレベルで揃ったというわけでもなかった。

今回のまとめでは、作品1から4までのように、「書く」活動の具体的素材が、勉強やクラブという生徒たちの日常から容易に見出せるため、飛び抜けて深い内容のものにもならず、レポート内容や質に大きな差異は見られなかった。

しかしこれは、ただ「浅い」ということではなく、学習が求める成果の如何によるものである。前回のような自身の内面の思考を表すものとは違い、今回は対象として『徒然草』という存在(具体)があり、それを現代に当てはめるといえるものである。元のものより上手く深く書けたら、それは『徒然草』が書けるということになってしまうだろう。

注目すべき点は、生徒たちが取り上げた(触発された)『徒然草』章段の多様さである。前述「授業の概要」に記した通り、一部に十数票を集める章段もあるが、学年全体を通してみると、問題演習を除いて授業で扱った全45段中40段にわたっている。また複数の章段へ言及している生徒も約三分の一に及んだ。さらに116段「寺院の号、さらぬよろづの物にも名を付くこと、昔の人は少しも求めず、ただありのままに安くつけけるなり…何事も珍らしきことを求め、異説を好むは、浅才の人の必ずあることなりとぞ」から、いわゆる「子供のキラキラネーム」を挙げるなど、授業で扱ったもの以外に自分で枠を拡げて『徒然草』を読んだ生徒も7名いた。

今回のような古典を現代に具体化するという「活動」は、「広い」学習に適合するものだと考える。

## (2) 『徒然草』の読み方

『徒然草』を扱う場合、単なる「教訓話」で終わらせないようにすることは難しい。『都鄙問答』などの江戸時代の文章を読んでも、『徒然草』がブームとなって古典扱いされるようになったのは、「教訓書」としての面も大きかったのではないかとも思われる。

また、『徒然草』の柱の一つである「無常観」は、『平家物語』や『方丈記』のものとも違い、現代の一般的な通念としての仏教思想ともズレがあるようで、実は教える側の私たち中高国語科教員もよくは分かっていない。私たちは、いわば現代風に漂白された「無常観」を通して『徒然草』を読んでいるようにも思われる。

筆者は、古典の学習で大切なことは、学習によって何を身につけるのか・読み取るのかという固定化した内容ではなく、学習を通して生徒の思考や発想をどのように深化・変容させてゆくのかという方法としての面にあると考えている。中高等学校での国語教育は中世文学の研究者養成が目的ではないので、兼好そのままの思想や世界観を魅らせる必要はない。『徒然草』の授業での読みの本筋は、「無常観」ではない。また、テキストから読み取った「教訓」を現代へと当てはめるだけでは、内容の一致をめざすセიმ・ゲームをしているのと同様で、これも授業の本筋とは言えない。

このように考えると、現代の国語教育で『徒然草』を読む大きな鍵は、例えば51段「五月五日、賀茂の競馬を」や177段「鎌倉中書王にて」など、各所にみられる筆者の自己言及・反照の姿勢であり、また、39段「ある人法然上人に」と、58段「道心あらば住む所にしもよらじ」、157段「筆を取れば物書かれ」とのような、これも各所に見られる一見矛盾した言説の並立であろう。これらテキストに表れた、兼好が自己言及・反照・矛盾対立によって深化・変容してゆく過程を読み取り、生徒がその深化・変容を自己に重ね合わせて読もうとすることが重要で、学習活動でもそのような内容・方法が求められる。

中学生や高校生が、特に古典を「教訓」的に読もうとするのは、「教訓」が自己の外にある限りは単なる説教として聞き流せるからである。自身を問うことなく右から左へと転写するだけの姿勢と、例えば作品1のコメント「…書いていると、なんだか自分を写しているように見えてきた」、作品5のコメント「…ここまで言っておいても、私もUFOを信じている…」などのような(微妙ではあるが)自己言及・反照を伴った活動とを区別し、生徒自身にも気付かせ、評価することが必要である。

## (3) 活動的な学習の展望

さらに、「活動的な学習」を深めてゆく芽として、今回の作品10と作品11との関係に注目したい。この二つの作品は、『徒然草』の別の章段から、「現代の医療」というほぼ同じテーマの発想をしているが、それぞれのエピソードでの主眼の置き方ははっきり異なっている。テキストから発想へのつながりが、作品10君と作品11さんとは、何が同じで、どこがどう違うのかを考えることは、私たちが「文章を読んで考えて書くことの可能性」について考えることになると思う。生徒の「活動」をフィードバックして、さらなる学習活動に組織発展させるということが、たぶん「主体的で深い」学習に繋がるのだと思う。

ただし、これはかかる手数が恐ろしくて、まだ実践には至っていない。余命があれば取り組んでみたい。